

ディーツゲンの社会理論とカント批判（1）

針 谷 寛

1. 認識論と社会主義

世界が理論において「永遠の自然法則」の形式で把握されるとき、このような世界における行為の可能性には二つの道しか残されない。変更不可能な「諸法則」を特定の目的に利用する技術的な道か、さもなくば純粹に内面に向けられた倫理的行為の道かである。だがいずれの場合も世界を変更する行為ではありえない。総体性のカテゴリーが失われ、個人の視点に立つとき、カントの理論哲学と実践哲学の間のこのような連関は不可避的な帰結となる。——かつてカント哲学の方法論的問題をこのように指摘したルカーチは、「マルクスがフォイエルバッハ・テーゼで中心要求に掲げた行為、実践とは、その本質からいえば、現実への浸透、現実の変更のことである」と言う。ルカーチがここで主張したのは、自己再生産的現実そのものの変更としての実践概念であった。とするならば、そこでは理論もまた、対象的世界にたいする観照的態度を克服し、現実を生成として把握するものとならねばならなかった⁽¹⁾。

1848年革命の衝撃を受けて思想的生涯を歩み始め、ドイツ社会民主主義の成立期にカント批判をこころみた労働者ヨーゼフ・ディーツゲン（1828—88年）が、労働概念を軸にマルクスからつかみ取った社会理論において直面したのも、本質的には、この理論と実践の統一問題であった。そして決定的に重要なことは、彼が労働概念をとおして、社会をたんに客体としてでなく、主体的にとらえたことであった。また注目すべきことに、彼は社会理論とは独自に、フォイエルバッハの思弁哲学批判を手がかりに認識論を展開することによって、カント二元論の批判をこころみもした。こうした形でおこなわれたディーツゲンのカント批判は、社会理論とどのようにつながりえたのであろうか。また社

会理論それ自体、理論と実践の統一可能性をどこに見出しえたであろうか。本稿は、従来かならずしも十分には検討されなかったディーツゲンの社会理論に光をあてることによって、彼の思想の歴史的な性格を考察することを課題とするものである。そしてまた、ディーツゲンの思想を検討することをとおして、ドイツ社会民主主義におけるカント-マルクス関係の系譜を一步さかのぼろうと意図したものである。

マルクス、エンゲルスとは「独立に」唯物弁証法を発見した労働者⁽²⁾、——『フォイエルバッハ論』でエンゲルスがこのように描いたヨーゼフ・ディーツゲンの哲学に、はじめて本格的な評価の光があてられたのは、今世紀初頭の社会民主主義内部の哲学論争においてであった。その口火を切ったのが、いわゆる「ディーツゲン主義」である。それは、マルクス社会理論にたいする認識批判的基礎づけを提唱する潮流の一つとして——新カント派およびマッハ主義の流れと交錯しつつ——ディーツゲン哲学によるマルクス主義の「補完」を主張した。たとえばオイゲン・ディーツゲンによれば、ディーツゲン哲学は、自然にたいする精神の依存性を、認識論的一世界観的に、「精神の本性」と「宇宙の自然」から根拠づけ、諸区別を存在の相互関連性において「統一」把握する「自然一元論」と特徴づけられ、マルクスの「歴史的一経済学的」弁証法を凌駕し、逆にそれを基礎づけるものと意味づけられた⁽³⁾。こうしたディーツゲン解釈にたいし、プレハーノフ、レーニン、メーリングがあいついで批判を加えたが、彼らにとって問題は、ディーツゲン哲学によるマルクス主義の「補完」要求そのもの、いいかえれば、マルクス理論における認識論的基礎の欠落という主張そのものにあった。その意味で、彼らはこの批判をとおして、マルクス主義の認識論的前提をフォイエルバッハの唯物論との関係において示し、それにもとづいてディーツゲンの認識論を唯物論のうえに位置づけようとしたのであった⁽⁴⁾。本来はマルクス主義解釈にかかわって展開されたこの論争を、ディーツゲン評価として見直してみるならば、この論争が——ディーツゲンの「獨創性」をめぐる評価の対立にもかかわらず——ディーツゲンの認識論をその社会理論から切り離して考察する評価の枠組そのものを共有していたという問題点を指摘しうる。たしかにこうしたアプローチはディーツゲンの自己評価とも

照応し、そこに正当な一面があることは否定されるべきでないだろう。ディーツゲン自身は、思惟理論がある程度まで自分の「独自に研究し、発見したもの」であるのになら、⁽⁶⁾「経済学的見解はすっかりそのままマルクスから受けとった」ものであるとして、前者を重んじていたからである⁽⁶⁾。だがそれにもかかわらず、こうした自己評価も、そのまま固定化されるならば、問題把握における陥穽となりかねないといわなければならない。なぜなら、そのことから、ディーツゲンの哲学が歴史と分離されるにいたるなら、彼の思想においてフォイエルバッハを超えるものも、その本質においては、見失われざるをえないからである⁽⁶⁾。ここに、弁証法の問題ともかかわって、ディーツゲン像の一面化があったといわねばならない。

ディーツゲンが運動史上の人物として登場するのは、なによりも、1868年、『デモクラティッシュェス・ヴォッヘンブラット』に連載された彼の「資本論書評」によってであるといえよう。それは、当時マルクスの『資本論』にたいしてはりめぐらされた「黙殺の陰謀」のなかで、エンゲルス以外の手で書かれた数少ない書評の一つ、しかも労働者自身の筆になる異色のものであった⁽⁷⁾。1864年春以降ペテルスブルクの皮革工場で働いていたディーツゲンは、『資本論』刊行後間もなくマルクスに手紙を送り、長年にわたるマルクスへの傾倒を伝え、あわせて自分の哲学的見解の概要を記したのであった⁽⁸⁾。ここに始まるマルクスとの文通のなかでマルクスから直接依頼を受けて、ディーツゲンの「資本論書評」は執筆された⁽⁹⁾。この「書評」は、しかし、たんにマルクスの書を紹介しただけのものではなく、むしろディーツゲンが1848年革命後の思想形成をとおして、マルクスから何を、どのような視点をもって学びとったかを、はじめて集約的に表現するものとなったのである⁽¹⁰⁾。すなわち彼は、労働概念を基礎に実践を把握し、社会をたんなる客体としてではなく、人間の自己産出的な主体的活動としてとらえ、労働にもとづく人間社会の共同性から市民社会の仮象を明らかにする、——このような角度からマルクス理論を照らし出したのである。そしてここにおいて、ディーツゲンのフォイエルバッハからの理論的分岐もまた決定的に示されたのであった。それと同時に、カント哲学の二元性を社会理論において克服する可能性も開かれたのであった。

「認識論は……すぐれて社会主義的要件である⁽¹¹⁾。」——ディーツゲンのこの言葉は、彼の認識論の性格を考える上では重い意味もっている。ディーツゲンによれば、思惟過程の認識が「あらゆる科学の基礎⁽¹²⁾」であり、彼の認識論の主題は「思惟過程一般の本性⁽¹³⁾」の認識にある。ひとはここに、一つの一般的認識論をもって社会主義理論の認識モデルとする企図を読みとることもできよう⁽¹⁴⁾。だがそれは社会主義理論のあり方にのみかかわる問題ではなく、もっと一般的に、一定の認識価値を主張することを意味するだろう。彼の思惟理論は「真理と誤謬を一般的かつ明白に区別する⁽¹⁵⁾」試金石を与えると主張する。ここにいう誤謬とは個々の判断にかかわるというよりも、原理的なもの、つまり「思弁的誤謬」を意味していた。「いかなる思惟も、ある客体、前提を必要とする」という事実の忘却、——これを思弁的誤謬として批判することにこそ、ディーツゲンがフォイエルバッハから受けとった基本視点があった⁽¹⁶⁾。とするならば、認識論の社会主義にたいする関係というものも、社会主義理論を直接に規定するものというよりも、むしろ認識論が批判理論としてもった実践的機能にかかわっていないであろうか。その意味では、このような思弁批判の方法としての思惟理論がどのような実践的機能を担って登場したかが問われねばならないであろう。ディーツゲンにおける認識論と社会主義の独自の関係づけも、彼が時代の意識状況をどのようにつかんだかということと不可分のものであろう。彼は、その構造を経験的なものと超越的なものとの二元論として特徴づける。そして、この超越的なものが問題となるのは、それが実践原理にかかわるからであった。この点で、彼は問題をカント的な枠組においてとらえていく。すなわち、彼は、理論的認識の彼岸に「道徳的世界秩序」を、「より高きもの」として設定する理論と実践の二元論こそ、実践を無力化し、現状の支配秩序を固定化する基本論理であると把握する。そして、彼によれば、この超越的なものにたいする理論的な温床として唯一残されているものこそ「認識の限界」問題なのであった⁽¹⁷⁾。このように見ると、フォイエルバッハからつかんだ方法をもってディーツゲンが立ち向かったのは、カント哲学、というよりもむしろカント的な時代であったということができよう⁽¹⁸⁾。そしてフォイエルバッハの思弁哲学批判を手がかりに、この叡智界の実践原理を思弁的誤謬

として批判することにより、新しい実践理論(社会主義)に道を開くこと、彼の認識論はこのような実践的意義を担っていたとみることができる。

ここで、認識論(=「理性再批判」)と社会理論とがディーツゲンにおいていざば並行して形成された過程を簡単にあとづけてみよう⁽¹⁹⁾。彼の哲学的探究の出発点は、48年革命が彼につきつけた「自由」の問題であった。それはただちにカント実践理性の問題であったわけではなく、さしあたっては革命の政治舞台で争われた自由であった。しかし、政治的自由の認識根拠にかかわって生じた「政治から哲学へ、哲学から認識論へ」という彼の視点の移動⁽²⁰⁾が、1850年代のドイツにおいて、カント的問題構成と無縁であり続けたと考えることはむずかしい。その点で、1855年にフォイエルバッハに送られたディーツゲンの最初の著述が、「道徳の亡霊を白日のもとにひき出す」意図で書かれたことは、示唆的であるといえよう⁽²¹⁾。彼は、1850年代早期にフォイエルバッハ、マルクスの著作を研究し、また自然科学者の著書を読み、認識論と労働論を形成していく。1861年アラバマで奴隷解放闘争の渦中で書かれた小論では、奴隷問題へのアプリアリな規範にもとづく対応を批判し、「労働形態」から出発する見解を示す⁽²²⁾。こうして彼は1860年代末に『頭脳労働の本質』を著わした時、労働概念にもとづく社会理論の基本構成をすでに確立していたのであった。

(注)

- (1) Vgl., G.Lukács, *Geschichte und Klassenbewußtsein*, Sammlung Luchterhand 11, S. 110-111, 城塚・古田訳, 86-88頁。
- (2) エンゲルス「フォイエルバッハ論」, 『マルクス・エンゲルス全集』, 第21巻, 298頁。
- (3) Eugen Dietzgen, Vorwort zur russischen Version des "Akquisit", in: *Erkenntnis und Wahrheit*, hrsg. v. E. Dietzgen, Stuttgart 1908, S. 368-370. 「ディーツゲン主義」の文献に以下のものがある。Cornelie Huygens, Dietzgens Philosophie, in: *Die Neue Zeit*, XXI-1, 1902, S. 197-207; E. Dietzgen, Der wissenschaftliche Sozialismus und J. Dietzgens Erkenntnistheorie, in: *Die Neue Zeit*, XXII-1, 1903, S. 231-239; Anton Pannekoek, Die Stellung und Bedeutung von J. Dietzgens philosophischer Arbeit, in: J. Dietzgen, *Das Wesen der menschlichen Kopfarbeit*, Stuttgart 1903; A. Pannekoek, Dietzgens Werk, in: *Die Neue Zeit*, XXXI-1, 1912, S. 37-47; Otto Ehrlich,

Kant und Dietzgen, in: *Die Neue Zeit*, XXIII-2, 1905, S. 118-123; Paul Dauge, J. Dietzgen und sein Kritiker G. Plechanow, in: *Erkenntnis und Wahrheit*, S. 393-428. パネクークとオイゲン・ディーツゲンらの相違については、前掲 Pannekoek, *Ditzgens Werk*, S. 38 u. 46などを参照。パネクーク、ホルターらオランダ社会民主主義の急進左派とディーツゲン哲学の関係にかんする文献名は、山本秀行「アントン＝パネクークとブレーメン社会民主党」、『社会運動史』1973, No. 3, 20頁; Gerhard Huck, *Joseph Dietzgen (1828-88). Ein Beitrag zur Ideengeschichte des Sozialismus im 19. Jahrhundert*, Stuttgart 1979, S. 15-16, に見出せる。

- (4) Vgl., G. Plechanow, *Joseph Dietzgen*, in: *Erkenntnis und Wahrheit*, 1908, S. 359-393; Lenin, *Materialismus und Empirio-kritizismus*, 1909; F. Mehring, *Kant, Dietzgen, Mach und der historische Materialismus* (1909), in: *Gesammelte Schriften*, Berlin 1961, Bd. 13, S. 205-218.
- (5) *Joseph Dietzgen an Eugen Dietzgen*, 7. Nov. 1883, in: *Josef Dietzgens Gesammelte Schriften*, hrsg. v. E. Dietzgen, Berlin 1930 (以下 *Gesammelte Schriften* と略記), Bd. 3, S. 55.
- (6) たとえばプレハーノフは、ディーツゲンにはマルクス、エンゲルスのみならず、フォイエルバッハと比べてきえも新しい点は何もないと言う (vgl., Plechanow, *op. cit.*, S. 364-365)。一方、ディーツゲン認識論のうちに弁証法を評価したもとのとして、レーニンの『唯物論と経験批判論』(4章7, 8など)が知られているが、ディーツゲン認識論について「マルクス以前の唯物論を凌駕する」ディーツゲンの成果と「フォイエルバッハの人間学主義の遺物」とを分析しようとしたものに、Otto Finger, *Leben und Werk Joseph Dietzgens*. Nachwort, in: *Joseph Dietzgen, Schriften in drei Bänden*, Berlin 1961-1965 (以下 *Schriften* と略記), Bd. 3, S. 443-505, がある。なお前掲 G. Huck, *Joseph Dietzgen* は、伝記的、運動史的視点に立つ実証的アプローチにおいて際立っている。
- (7) ディーツゲンのこの「書評」を紹介したものに、良知力「『資本論』第一巻の反響、ドイツ」、『経済学史学会編『『資本論』の成立』、1967年、341-365頁、がある。
- (8) 1867年10月24日/11月7日付のものをもって始まるマルクスあての書簡は、ディーツゲンの処女作『人間の頭脳労働の本質』(1869年刊)が完成される経過を伝える資料となっている。これらの書簡は *Schriften*, Bd. 3, に収録されている。ディーツゲンの哲学にたいするこの間のマルクス、エンゲルスの評価については両者の書簡、とくに1867年11月26日、1868年10月4日、11月6日、7日、また、マルクスのクーゲルマンあて1867年12月7日、1868年12月5日、12日、S. マイアーあて1868年10月28日付の各書簡を参照。

- (9) Dietzgen an Marx, 20. Mai 1868, in: *Schriften*, Bd. 3, S. 405.
- (10) この書評ほどの密度はもたないが、これに先がけてペテルスブルク、およびベルリンの手工業者団体の機関誌上でおこなわれたマルクス理論の紹介については、E.A. Korol'cuk/N.B. Kruskol, *Über die Propagierung der ökonomischen Lehre von Karl Marx in Rußland in den sechziger Jahren des 19. Jahrhunderts. Sechs Beiträge Joseph Dietzgens*, in: *Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung*, Jg. 15, 1973, Heft 1, S. 64-95; Eike Kopf, *Zur Propagierung von Marx' "Kapital". Drei Artikel von Joseph Dietzgen*, in: *Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung*, Jg. 10, 1968, S. 635-644.
- (11) Dietzgen, *Die Grenzen der Erkenntnis*, in: *Vorwärts*, 28. Nov. 1877.
- (12) Dietzgen an Marx, 24. Okt./7. Nov. 1867, in: *Schriften*, Bd. 3, S. 400.
- (13) Dietzgen, *Das Wesen der menschlichen Kopfarbeit. Dargestellt von einem Handarbeiter. Eine abermalige Kritik der reinen und praktischen Vernunft*, Hamburg 1869 (以下, *Kopfarbeit* と略記), S. 16, 森田訳, 27頁。
- (14) ディーツゲンにとっては自然科学が「あらゆる科学のモデル」であり、「自然科学の認識原理の普遍化が社会主義理論の追求目標となりえた」と考えるものにG. フックの見解がある(G. Huck, *Zum Verhältnis von Theorie und Praxis bei Heß, Lassalle, Lange und Dietzgen*, in: *Arbeiterbewegung an Rhein und Ruhr*, hrsg. v. Jürgen Reulecke, Wuppertal 1974, S. 25-50.)。また認識論と社会主義の関係を、マルクス社会理論にたいするディーツゲン認識論の補完関係と解したのが「ディーツゲン主義」であった。
- (15) Dietzgen, *Kopfarbeit*, S. 4, 邦訳16頁。
- (16) *Ibid.*, S. 14, 邦訳25頁。
- (17) Dietzgen, *Die Grenzen der Erkenntnis*, *op. cit.* ディーツゲンのカント批判が、彼の時代においてカント哲学の果たす実践的機能に向けられていたこと、つまり「カント復興」としてのカント主義の問題にかかわっていたことについて、次のことばを引いておく。彼によれば、ひとつひとつがカントにかえろうとするのは、「形而上学が再びもぐりこめる裏口を、カントの体系が開けておいたからである」。カントと「遅参者たち」との間には「本質的な区別」がある。「プロイセンの御用哲学者たちは、その『学問』によって反動政治に雇われているのである」(*Sozialdemokratische Philosophie VI*, in: *Der Volksstaat*, 15. Sept. 1876.)。
- (18) ディーツゲンとカントの関係について、メンデは、ディーツゲンが新カント派形成期に新カント派とは逆の方向で物自体概念を批判した点に理論的意義を認めている(vgl., Georg Mende, *Einführung*, in: Joseph Dietzgen, *Das Wesen der menschlichen Kopfarbeit*, Berlin 1955, S. 55-57.)。他方新カント派社会主

義者のなかでは、マックス・アドラーがディーツゲン認識論を批判哲学の精神で解釈し (Max Adler, *Kausalität und Teleologie im Streite um die Wissenschaft*, in: *Marx-Studien*, hrsg. v. M. Adler u. R. Hilferding, Wien 1904, Bd. 1, S. 289-290), フォアレンダーは、「マルクス主義の歴史観と認識批判的倫理学との結合」の流れの中にディーツゲンを位置づけた (Karl Vorländer, *Kant und Marx. Ein Beitrag zur Philosophie des Sozialismus*, Tübingen 1911, S. 88-103.)。

- (19) 形成史については、本稿と解釈は異なるが、G. Huck, *Joseph Dietzgen*, に詳しい。
- (20) Dietzgen, *Das Akquisit der Philosophie*, in: *Gesammelte Schriften*, Bd. 2, S. 257-259.
- (21) Vgl., Dietzgen an Feuerbach, 24. Juni 1855, in: *Schriften*, Bd. 3, S. 397-398. この草稿は未発見であるが、「道徳の本性」を解明する意図でフォイエルバッハの影響のもとに書かれ、フォイエルバッハに送られた。
- (22) Dietzgen, *Schwarz oder weiß?*, in: *Gesammelte Schriften*, Bd. 3, S. 63-66.

2. 「頭脳労働」の世界におけるカント批判

ディーツゲンの認識論が——彼の実践的関心の点からみるとき——カント実践哲学と二元論にたいする批判方法であったとするならば、ここで果たさねばならないことは、それを、認識論として全面的に検討することではなく、カント批判としての理論的特徴、その意義とそこに含まれる問題を考察することに限定される。その意味で注目されるべきことは、第一に、カントの先験哲学の立場とは方法的に対立するディーツゲンの認識論的考察視点の特質であろう。これは「思弁的誤謬」の批判という彼の基本テーゼにかかわるものである。このような観点からおこなわれたカント実践哲学批判が、まず考察されねばならない。第二には、カント実践原理にたいするディーツゲンの批判が「認識の限界」問題、つまり物自体概念にたいする批判としておこなわれたこと、そのことの意味およびそこに含まれる問題を考察することである。さしあたり、問題を明確にするのに必要なかぎりにおいて、カントの実践哲学と理論哲学の關係について、簡単にふりかえってみなければならない。

周知のように、カントの哲学において実践は諸個人の意志の自律から把握され、この内的意志規定の普遍的妥当形式 (道徳法則)こそ社会的共同性のアブ

リオリな形式であると意味づけられていた。このような見解は、社会をたんなる自然的客体としてではなく、主体的、実践的に把握しようとしたものといえる。彼において実践とは「自由」(自己規定)にもとづく行為を意味していた。しかしこの実践原理は、理論的認識(世界の「自然」としての把握)と分離され、社会および人間そのものが自由と自然の二つの原理のもとで引き裂かれることになる。そこにカント実践哲学が現実のなかでの実践原理として露呈する無力さの原因があった。——この理論と実践の二元論の問題は、彼の体系構成との関係で見ると、自然と自由の対立把握から発していた。カントにおいて自由概念は因果系列の無条件者と把握される。そして自由と自然必然性とは、同一の物自体の規定としては両立しえないと考えられる。そこから、実践哲学原理としての自由と理論哲学原理としての自然の両立可能性を示さねばならぬという体系上の要求が生ずる。これにたいするものとしてカントの与えた解決が、「自然必然性の法則に従う因果性はたんに現象に、だが自由は物自体そのものとしてのこの同じ存在者に帰す⁽¹⁾」という形で現象と物自体とを分離し、それぞれに自然と自由の法則性を帰属せしめることであった。その意味で、物自体の概念は、カントの理論哲学と実践哲学を体系的に両立せしめる結節点をなし、実践原理の先験的根拠をなすものであった。——こうした物自体概念の設定は、カントの理論哲学そのものの方法的立場とも照応していた。すなわちカントの理論哲学は、経験の対象を先験的主観の統一する現象としてとらえる反省に立脚する。そこでは、感性和悟性のアプリアリな形式が、経験の可能性の条件であるのみならず、同時に「経験の対象の可能性の条件⁽²⁾」でもあるとされ、かくして現象と、無時間的な物自体との原理的区別が設定されたのであった。

カントの先験的考察の立場にたいし、ディーツゲンは自己の立場を「経験的認識能力にかんする非哲学的科学⁽³⁾」と特徴づける。認識論的反省の前提に、まず反省以前の対象認識がおかれる。これは彼の「思弁的誤謬」批判という立場からの直接の帰結であった。すなわち彼によれば、第一に、思惟は活動であり、「労働」である。たんなる思惟能力はまだ現実的思惟ではない。思惟は「対象なしには実存しない⁽⁴⁾」。したがって、第二に、思惟の概念を求める思惟理

論にとっても、「個々の経験された思惟の事実が客体となる⁽⁶⁾」。ここに「思惟の事実」とは一つの存在関係としての対象認識と解されているから、彼の思惟理論は対象認識にかんする第二次的反省⁽⁶⁾ともいうべきものである。ディーツゲンの思惟理論においては反省主観が先験的意味をもつことはない。そしてディーツゲンは、実践を思惟の原理で基礎づけたカント哲学に対し、このような思惟理論をとおして、思惟の機能を主客の認識関係一般に還元することにより、批判をこころみたのである⁽⁷⁾。これは、ディーツゲンのいう客体がフォイエエルバッハの感性的対象の概念を継承していることにかかわっている。ディーツゲンが客体なしの思惟を「思弁的誤謬」というとき、この客体概念が、フォイエエルバッハにいわゆる「感官の客体としての現実的なもの」、「感性的なもの⁽⁸⁾」をふまえていることは疑いないだろう。だが対象が、感性の受動性に与えられる現実的なものとしてのみ把握されるならば、このような主-客関係においては、思惟の「活動」も本質的に観照的なものとなる。もっとも、彼の感性概念には、上記のこととは裏腹に、思惟の現実性を、それが思惟（理論）の客体であることをもって「感性的」と規定するような「用語の二義性」がつきまわっているが、そのことの問題性は従来から指摘されており、ここでは立ち入らない⁽⁹⁾。

ディーツゲンの思惟理論は、先験的立場を否定し、主-客の認識関係の基本を反映として把握する。上に触れた感性概念の問題性からときには不明瞭になることはあっても、彼は、主-客関係の基礎に、意識から独立の存在規定をおき、「われわれの意識のそと、観念のそとでもなお或るものである⁽¹⁰⁾」存在について語る。それは、カントの場合とは違って、先験的に現象から切り離された無時間的なものという規定を受けることはない。それは、「何らかの仕方で感性的に知覚され、見られるか、聞かれるか、嗅がれるか、味わわれるか、触られるか、要するに経験され⁽¹¹⁾」ることによって意識に与えられる。こうして、世界は外界と表象界とへ「二重」化され⁽¹²⁾、観念は事物の「像」とつかまれる⁽¹³⁾。それは逆にいえば、客体の側にさまざまな「特殊な感性的諸性質」と、思惟によってつかまれる「普遍的、精神的性質」が属していることを意味する⁽¹⁴⁾。このような主-客関係の把握にたつて、ディーツゲンは感性と悟性の

統一を主張し、「われわれの感官にとって世界は多様なものである。頭脳が世界を統一として総括する⁽¹⁵⁾」,と云う。この言葉はかつて新カント派社会主義者マックス・アドラーによって「批判哲学の思想」と合致するものとして注目されたが⁽¹⁶⁾,しかしこれはむしろカントとの対立を前提したものとみるべきであろう。ディーツゲンが感性と悟性の形式に「アプリアリ」な性格を認めているとしても、それは対象にたいする先験的意義をもつものではないからである⁽¹⁷⁾。——ディーツゲンが思惟理論において、主—客の認識関係の本質規定＝思惟の概念とみなしたものは、しかし、反映それ自体ではない。彼は感性—悟性に特殊—普遍カテゴリーを重ね合わせることによって、思惟(認識)の概念を「特殊的なものから普遍的なものを展開すること⁽¹⁸⁾」と規定する。そしてここから認識の真理基準が導き出される。「感性的諸現象のある所与の圏内における普遍的なものが真理である⁽¹⁹⁾。」ここに登場する特殊—普遍カテゴリーは、ディーツゲンの中心概念となるものであるが、その根本性格は形式論理的な類概念と種概念に立脚したものである。ディーツゲンの認識規定＝思惟の概念は、いわば「定義」的認識⁽²⁰⁾の規定とみることができよう。——ディーツゲンによれば、このようにして把握された「思惟の概念」が、すなわち「理性の概念」であり、「純粹理性」にほかならない⁽²¹⁾。いいかえれば、「純粹」理性の合理的意味は、思惟(すなわち認識関係)の「概念」に還元しうるとされるのである。これにたいし「実践的」理性、理性の「実践」とは、多様なかたちでおこなわれる思惟活動、つまり個々の認識活動の実存を意味するものとされる。したがって、ディーツゲンの「頭脳労働」の世界においてカント「実践理性」の占めるべき場所はない。それは、欲求にもとづく行動における合目的性の判断にかかわるものとして、理論的認識に還元される⁽²²⁾。理論的認識を凌駕する「実践理性」とは「思弁の誤謬」にほかならないとされるのである。

ディーツゲンはカント「実践理性」を思弁の誤謬とし、思惟の概念からの排除をはかっただけではなく、カントにおいて叡智の実践原理の理論的根拠とされた可想体としての、認識不可能な物自体の概念にたいしても批判をこころみた。この批判は、カントの体系構成に照応したものとして、その体系構成の解体をとおして実践原理を否定せんとしたものといえよう。だがディーツゲン

は、物自体の批判をこころみることによって、同時に実践の問題領域にふみこんでいたのであった。ディーツゲンの思惟理論が、実践の理論としての社会主義理論にたいし理論的かわりをもちえたとすれば、それはまさにこの問題領域においてであったらう。それは、カントが無条件者において考えた総体の規定可能性にかかわる問題であった。

ディーツゲンはさしあたり、認識一般の規定において、すなわち現象における普遍的なものの把握という規定において、物自体の認識が現象の認識と異なることを示そうとする。ここで彼のいう物「自体」とは概念においてつかまれる普遍的規定であり、現象とは対象が感性的に与えられる仕方である。そして頭のなかでつかまれる普遍的なものは、現象のなかに内在してもいる。こうして「世界自体」とは「世界の諸現象の総和」と解される⁽²³⁾。一方、彼は問題を、本質—現象、物—性質、全体—部分などの相関においてとらえ直していく。これに応じて、現象概念も存在規定としての意味をもつものとなる。そこでは諸現象そのものが本質的關係としてつかまれる。カントにおいて物自体は、自由と自然の調停構想のなかで認識不可能性を原理化され、現象から分離されたとすれば、ディーツゲンは存在の統一性の視点から物自体と現象の不可分性を主張し、現象—本質関係を存在論的に把握する。彼によれば、物自体は「現象」するかぎりにおいて「存在」し、「本質は……現象のなかに存在する」のである⁽²⁴⁾。しかしディーツゲンにおいて現象概念は、相関の特定の類型として具体化されずに、存在の相互連関のあり方一般の規定と解されていく。「世界はただ連関においてのみ存在する。連関から引き離された物は存在することをやめる。物は、それが他者にたいして für Anderes あること、作用し、現象することによってのみ自立的 für sich に存在する。⁽²⁵⁾」このように存在の仕方と解された現象は、たしかにカントの物自体—現象の分離を克服する重要な視点となりえよう。だがそのためには、相関の存在論的把握が、認識論的主—客関係から分化し、具体化されねばならない。しかしディーツゲンにおいてこの両視点はむしろ未分化であったというべきであろう。彼においては、たとえば、現実的 wirklich であることは、作用的 wirkend であること、現象 erscheinen すること、感性的 sinnlich であることを意味していた⁽²⁶⁾。問題

は、ディーツゲンが物自体と現象の関係存在論的相関としてつかもうとしたことにあるのではなく、むしろそれが認識論的規定の抽象性のうちにとどまったところにあったといえよう。その意味で重要なのは、彼がこの同じ関係を普遍—特殊カテゴリーで論理化しようとしていたことである。たとえ彼の普遍—特殊カテゴリーが根本性格において形式論理的であったとしても、その関係が重層的に考えられていくことによって、それなりに対象を構造的に把握する方向性はもちえたからである⁽²⁷⁾。

しかしディーツゲンによる物自体の批判において、カントがそこにこめた無条件者、総体性の問題は、そのものとして把握されることはなかった。それは「総和」としてつかまれても、自己産出的なものの論理として把握されぬままに終わる⁽²⁸⁾。そのかぎりにおいて、彼は、理論と実践の二元性批判を課題として展開したカント批判において実践的なものの論理にいたりえなかった。彼の社会理論において検討されるべき問題も基本的にはこの点にかかわっているのである。

(注)

- (1) Kant, *Kritik der praktischen Vernunft*, hrsg. v. K. Vorländer, Philosophische Bibliothek, S. 111.
- (2) Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, B. 197.
- (3) Dietzgen, *Kopfarbeit*. S. 13, , 邦訳24頁。
- (4) *Ibid.*, S. 17, 邦訳28頁。
- (5) *Ibid.*, S. 24, 邦訳35頁。
- (6) N・ハルトマン『存在論の新しい道』, 熊谷訳192頁, 参照。
- (7) ただし, 思惟の現実化作用を明確に指している例外的な箇所として, *Kopfarbeit*, S. 30, 邦訳41頁, がある。
- (8) Feuerbach, *Grundsätze der Philosophie der Zukunft*, §. 32.
- (9) いわゆる物質概念にかかわるこの問題については, vgl., Plechanow, *op. cit.*, S. 387-391; さらにレーニン『唯物論と経験批判論』(第4章, 8)参照。
- (10) Dietzgen, *Kopfarbeit*, S. 20, 邦訳31頁。
- (11) *Ibid.*, S. 22, 邦訳33頁。
- (12) *Ibid.*, S. 20, 邦訳31頁。
- (13) *Ibid.*, S. 50, 邦訳60頁。
- (14) *Ibid.*, S. 23, 邦訳33—34頁。

- (15) *Ibid.*, S. 21, 邦訳32頁。
- (16) M. Adler, *Kausalität und Teleologie*, *op. cit.*, S. 289.
- (17) この点を指摘したものに, O. Ehrlich, *op. cit.*, S. 120, がある。
- (18) Dietzgen, *Kopfarbeit*, S. 29, 邦訳40頁。
- (19) *Ibid.*, S. 53, 邦訳62頁。
- (20) ヘーゲル『小論理学』227—231節参照。
- (21) Dietzgen, *Kopfarbeit*. S. 31-32, 邦訳42—43頁。
- (22) ディーツゲンの「実践理性」批判(『頭脳労働の本質』第5章)のうちに, カントの道徳的自律の思想を認めるものに, Vorländer, *op. cit.* がある。
- (23) Dietzgen, *Kopfarbeit*, S. 31, 邦訳42頁。ただし, ディーツゲンは, 世界の総体性についてはそれを「汲みつくしがたい宇宙」(Akquisit, S. 289.)と把握する。したがって物自体—現象の相関も, 相対性の場で考えられていく。
- (24) Vgl., Dietzgen, *Kopfarbeit*, S. 42, 邦訳52頁。
- (25) Dietzgen, *Kopfarbeit*, S. 31, 邦訳41—42頁。
- (26) Vgl., *ibid.*, S. 18-19, 邦訳29—30頁。
- (27) ただしこの点で, 彼が思惟を「絶対的に量的」(*ibid.*, S. 45, 邦訳55頁)なものとして, 感性の「質」に対置していることにも示されるように, 彼の普遍概念は抽象性を脱しえていない。
- (28) 「ヘーゲルを学ばなかったことこそ彼の不運なのだ」, ——ディーツゲンにかんしてマルクスがもらしたこの言葉は, この点にかかわっていると思われる(「マルクスからエンゲルスへ」, 1868年11月7日付, 『全集』第32巻, 157頁, 参照)。

(筆者の住所: 東京都目黒区大橋2—12—20)